

第3回 和歌山県「IR 誘致に関する有識者会議」

日時：2022年2月19日（土） 13:00～15:00

場所：グランヴィア和歌山 6階 ル・グランA

○座長・委員 ●知事 △事務局

△（楠見室長）

定刻になったので、第3回和歌山県「IR 誘致に関する有識者会議」を始めさせていただきます。進行を務めさせていただきます IR 推進室長の楠見です。よろしくお願いいたします。なお、本日は伊藤座長、大久保委員が WEB でのご参加となっている。始めに、報道関係者の皆様においては、冒頭の撮影は議事開始前まで、とさせていただきますので予めご了承願う。なお、会議終了後、15 時頃を目処にこちらの会場で伊藤座長と知事のぶら下がり会見を予定しているのでよろしくお願いいたします。それではまず、知事の仁坂より挨拶を申し上げます。

●（仁坂知事）

皆さん、お忙しいところ、かつ、コロナで色々ご不便なところこのようにお集まりいただきありがとうございます。IR に関する有識者会議の委員としてお願いをして以来、結構時間が経っているが、一番はじめに基本構想について議論していただき、それから実施方針について議論していただいた。その後、谷口さんや吉川さんに委員になっていただき、事業者選定のプロセスに入り、優先権者が決まったので、優先権者と区域整備計画案を作る作業を現在行っているというところである。ようやく、計画がほぼ出来上がってきており、それをパブリックコメントにかけたという状況で、これから説明会や公聴会といったプロセスを経て、国に提出する前に色々手続がある。例えば、県議会の承認も必要であり、そして立地市の和歌山市の同意も必要であり、それらをこれからやっていかないといけない。なんと言っても、国に認定を受けるためには区域整備計画が良いものでなければいけないと思う。そういう意味で、幅広い見地からそれぞれご見識をおもちの皆様方に、忌憚なき、或いは大所高所からご議論をいただければ、我々は更にそれをもとに、よいものを作っていきたいと考えている。今日はよろしくお願いいたします。

△（楠見室長）

続いて、有識者会議座長の伊藤元重様より一言願います。

○（伊藤座長）

本日はオンラインで失礼する。コロナ危機を経て、地域も国も、コロナ後の社会の方向性の再構築を検討しなければいけないという状況である。また、会議の中でもコメントしたいと考えているが、コロナ危機によって社会のスピードが速くなってきているということにも注意をしないといけない。その中で和歌山県、あるいは関西広域の地域の活性化を考える上で、今の時点で、この特定複合観光施設の区域整備計画がまとまろうとしているということは、まさに絶妙、絶好のタイミングであると思う。この計画を検討すること自体が、地域

の活性化、あるべき姿を考える上で重要な論点を洗い出す重要な契機になると考えており、行政の方々はもちろんだが、多くの地域の方々にこの計画に関心を寄せていただき、議論が広まっていけばいいなと考えている。交流人口を増やすということは、少子高齢化の社会の中で人口減少が続いている地域の活性化にとっては極めて重要であることは今更申し上げることもないが、その交流も、従来の物見遊山的な観光だけでなく、より多様で深みのある交流につなげていくような観光をぜひ促進していただきたいと考えている。

そうした先進的な観光を進めていくためにもこのIRのような施設が大きな意味を持つことになる。IRを計画すること以上に、実際に様々な活動を通じてこの事業を実現していくということが大事で、その先の実行面での取組にぜひ期待したいと考えている。

△（楠見室長）

ありがとうございました。ではここで、委員の皆様をご紹介させていただく。

（※五十音順に紹介）

それでは、議事に入らせていただく。マスコミ関係者の皆様にはここで一旦ご退出いただくようお願いする。

次に、お手元の資料のご確認をお願いする。

（※資料の確認）

では、進行を伊藤座長に預けさせていただく。伊藤座長よろしく願います。

○（伊藤座長）

まず、和歌山県特定複合観光施設区域整備計画（案）については、事務局から各委員に対して事前に説明していただいたので、本日は、意見交換の時間を長く取るため、事務局からの説明は省かせていただきたいと考えている。ただ、事務局からの事前説明を踏まえて、疑問点や確認したいことがあれば、今この段階で挙手の上、ご発言いただきたい。

（疑問点や確認したいことについて発言なし）

また、後ほどご発言の中でも疑問点などあればあわせてご発言いただければと思う。それでは早速、意見交換に入らせていただく。私の方から指名させていただくので、委員の皆様それぞれの専門的知見に基づくご意見や、和歌山県、和歌山IRに期待することなどについて、どのようなことでも構わないのでご発言いただきたい。

はじめに、谷口委員からお願いしたい。事業者選定委員会の委員長も務められたということで、今回の区域整備計画（案）と事業者選定時点の提案内容の比較について所感も含めてご発言いただきたい。それでは谷口委員よろしく願います。

○（谷口委員）

ただいま、伊藤座長からご指名いただいたので発言をいくつかさせていただきます。今、ご紹介いただいたように、私はIR事業者の選定委員会の委員長を務めさせていただきました。知事のご挨拶にもあったが、2021年2月13日、28日、4月18日と、休日にも関わらず委員の皆様の実心な取組によって事業者を選定することが出来た。その後、新型コロナウイルス感染症の感染拡大や、サンシティの辞退など、これまで一筋縄ではいかなかった軌跡を振り返って、選定委員の皆様と県当局の実心な取組に改めて敬意と感謝の意を冒頭申し上げた

いと思う。

選定委員会時と今回の計画内容を比較させていただき、改善された点が多く見られるが、ここでは私が感じたことを4点、簡単に述べさせていただく。

まず、コンセプトであるが、テーマが和歌山の自然資源と世界最先端のスマートテクノロジーの融合、コンセプトが Sports & Wellness、Undiscovered Japan、Sustainability とされており、より明確に、世界にアピール出来る表現になっていると思う。また、都市型 IR である大阪との共存ということも述べられており、これは大切な視点であるため、コンセプトは良いかと思う。

IR 和歌山（仮称）というのは、いつまでこの（仮称）が使われるのかということ懸念しており、キャッチコピーというか、英語ではアドバタイジング・スローガン（advertising slogan）と言われるそうだが、キャッチコピーみたいなものが必要かと思っている。そういう意味では、IR 和歌山（仮称）をもう少しインパクトのあるキャッチコピーにした方がよい。私の思いつきで申し上げますと、「自然豊かで歴史文化の香り高く進取果敢な和歌山 IR」「楽しめてよし、くつろげてよし、来てよし、和歌山 IR」などインパクトのある味付けをしていただいたらよいのではと思った。

2点目は、施設意匠について、前は高い建物が4～5棟高くそびえているという単純な意匠の印象であったが、今回は訪問客を広く流れるように迎えるような、オープンマインドのような感じで一体感があってインパクトのある意匠に改善されたという印象を受けている。

環境負荷という点では、我が国も2050年のカーボンニュートラルという方針を明確にしており、国の方針に従って、前回より少し取組が具体的になっていると思う。今後、カーボンニュートラルに向けてスピードアップしていくこととなると思うので、本番に備えて充実をお願いする。

カジノ事業の収益の活用に関しては、選定時に少し控えめな印象を受けていたが、具体的な提案になっており進展していると思う。県民の理解、支持を得て事業を継続するためには欠かせない視点であるため、引き続きよろしく願います。

次は、辛口のコメントもさせていただく。選定された時の課題が未だ完全にクリアされていない点が2点ある。

1点は交通関係である。「大規模開発地区関連交通計画マニュアル」に基づき、和歌山 IR の開業に伴う交通影響予測評価を実施ということであり、また、より詳細な4段階推定法の手法を用いて交通計画を改めて検討とあるが、要は、まだ詳細な検討がなされていないということである。私は実家がこの近くということもあり、現在でも朝夕のピーク時を中心に渋滞が見られるということを知っているので、改めて詳細な検討をお願いしたい。例えば、新交通の検討と表現されているが、その新交通が出来るかどうかによって対応も異なるかと思うので、具体的な検討を前提に詳細な計画が求められるのではないかと思う。

また、交通需要マネジメントという面もあるが、日にち単位ではなく時間帯を含めて検討していただく必要がある。

2つ目は資金調達である。新型コロナウイルス感染症の収束が不透明で、生活経済社会の先の見通しがたたず具体的に決められないということであろうかと思うが、これは非常に重要なことであるため更に検討を深めていただく必要があるのではないかと思う。借入に

つについてはクレディ・スイスからハイリー・コンフィデントレターを入手しているということであるが、私の印象では、更なる検討にあたってはもっと事業者の取組姿勢や熱意を強く感じられるような内容にさせていただく必要があると思う。

最後に、最終的にはこの和歌山 IR が選定されるということが重要だと思うので、2点申し上げたいと思う。

1点は、日本の伝統文化といったありふれた表現に止まらず、大都市や他の地方とは異なる和歌山 IR らしさを、重複をいとわず、随所に登場させた方がよいと思う。少し遠慮がちなところがあるので、もっと和歌山の素晴らしさを強調した表現を随所にちりばめることが、和歌山らしさを知っていただく、浸透させるためにも重要なのではと思う。和歌山の自然資源というのがコンセプトで使われているが、私はもっと歴史文化や、進取の気性など精神論などを、もっと具体的にふれた方がよいのではないかとと思う。

地方創生や都市型 IR、大阪との共存に関しても記述されているが、大阪との地理的な関係を問題にするのではなく、大阪と相互補完、相互互惠の関係にあるというようなことを強調した方がいいのではないかとと思う。個人的には国土強靱化、地方創生が国の大きな政策だと思うが、国土強靱化に比べて、地方創生がシャビーだと思っており、先ほど座長のご挨拶にもあったが、コロナ後のスピードアップが必要だと思う。国土強靱化並みに地方創生を加速することが重要だと思うので、そのトップバッターの施策として、この IR が位置づけられればよいと思う。IR の選定にあたっては、地方創生を加速するという観点を盛り込んでいただければと思う。

2点目は、先ほど座長のご挨拶にもあったが、計画だけではなく実行ということで、多くの方々、県民の参画が重要ではないかということである。アフターコロナの和歌山のあるべき姿を考えるために、IR を契機にということも含まれているのではないかとと思う。そういう意味では、オリンピックの招致ではないが、地方創生の加速のために、国、政府や広く国民の方々には好印象をもっていただくことが重要ではないかと思うので、県民の理解と協力の輪を広める努力が今後も重要ではないかと思う。特に、知事のご挨拶の中にもあったが、これから説明会、公聴会が予定されており、是非、和歌山県民からの期待が広がるような継続的な努力とともに、地方創生という観点も含めて、国、政府や広く国民全体に好印象をもってもらえるような活動をしていただければと思う。私としても、和歌山 IR が契機となり、インフラ整備が進み、和歌山の広域的かつ深化した発展につながることを祈念して、コメントをさせていただく。

○（伊藤座長）

ありがとうございました。それでは、続いて、大久保委員からお願いできればと思う。食文化や食を通じた和歌山、日本の魅力といった観点やその他何でも結構なので、和歌山 IR についてのご発言をいただければと思う。それでは、大久保委員よろしく願います。

○（大久保委員）

谷口委員の話でだいぶ煮詰まったという感じで、私は食文化に特化して発言する。食文化の発信の施設のところに、日本の伝統文化に資する施設とある。その内容で大体いいと思っているが、テーマが自然との共生、人との共生、歴史伝統との共生と、共生に特化している。

言われることはよくわかるが、食文化としては共生ではあるが、共食もコロナによって、問題が発生しており、個人も大切、共生がすごく大切なのはわかりますが、そればかりではないような気がする。表現の仕方がわからないが、工夫が必要かなという感じがする。具体的には、外国人にとって、と書いている。国際化が進んでおり、和食がユネスコの無形文化遺産に登録されて9年目に入ったが、日本人がユネスコに登録された和食に関して、関心が薄れてきた感じがする。初めの頃はすごくよかったが、持続して考え方を浸透させなければならぬと思うので、是非この施設ができれば、重要視して、和食というものはどういうものであるかや、大切にしていけないといけないものということを強調していただきたい。外国人は色々なことを調べているので、日本人よりわかっている方がいる。日本人にも改めて知識が必要なのではないかと思うので、この施設を作るということはとてもいいことだと思う。この施設ができあがるまで年数を要するので、その頃までに国をあげて、日本人の和食に対する考えを把握して、誰もが尋ねられたらある程度のことが話せるということが必要だと思う。

具体的に言うと、和歌山は海、魚の文化があり、山林面積も広いので山の文化がある。特産の梅やミカンなどに特化して広げていければいい。梅はすごくいいと思うが、高い。ブランドとしてはいいが、もう少し身近なものになる運動もしてほしいなと思う。金山寺味噌、濃口醤油の発祥地であるということが、紀州の殿様の文化をひいているためか、控え目、上品という感じがしており、意外と知らない人が多い。そのため、その辺のPRも必要。

もう一つは、水がとってもきれいで、おいしいと思うが、その辺のことは考えているのかなと思う。山形の鶴岡市と食文化的に似ていると思う。山形の場合は、羽黒山の山伏の文化を背景にして、農産物が非常に発達している。最近、熊野のあたりから奈良の柿の葉寿司に影響を与えたということの研究している人がいる。和歌山から奈良までの鯖街道を考えていて、奈良まで鯖街道が続くと、若狭まで鯖街道が続くので、太平洋側から日本海側に一本で通るということも漏れ聞こえてきた。一つのインパクトとして、伝統、伝承、それから人々が、塩街道から始まって、鯖街道になっているというあたりも掘り起こしてもいいかなと思った。そういう意味で、食文化の捉え方については、そこに人々の生業が入っていて、生活の仕方、どういった考え方をしたかということ掘り起こして、知恵を付加して、伝えていくことが必要だと思う。観光で来ると、おいしい、そんな風に作るのか、というだけで技術だけ教わって、おいしかったねで終わるが、そうではなくて、そこにプラスされた知恵を次の人達にバトンタッチしていくことが必要かと思う。これまではそれで良かったが、これからは考え方や生きる力みたいなものを伝承から学び取ることが必要だと思っている。

○（伊藤座長）

ありがとうございました。それでは、続いて佐伯委員からご発言いただきたい。佐伯委員はIR全般に精通されており、日本型IRの特徴、世界のIRの比較などを踏まえたご意見や和歌山のIRに関するご発言をいただければと思う。佐伯委員、お願いする。

○（佐伯委員）

大きく分けて2点申し上げたいと思う。

一点目は、IR全体としてあまりカジノに期待しすぎるなということで、二点目は、大き

なくくりで申し上げると、カジノの部分に関して、事業者が選定されたが、カジノのオペレーターに全体のオペレーションを丸投げするなということ、大きく分けてこの2点です。

まず、カジノに期待しすぎるなという点ですが、県当局の色々なご努力もあり、間違いなく当選確実という状態であると思うので、これから先は、どんな立派なIRを作るかというところに、努力を傾注していくべきだと感じている。申し上げたいことは、カジノに対して、賛成する人も、反対する人もカジノというモノを大げさに考えすぎているのではないかと感じる。和歌山にできるIRに限らず、大阪や長崎も候補ですが、日本にできるカジノは世界のカジノのスタンダードから見て、しょぼいカジノというか、大規模なものができるわけではない。世界のカジノに行き慣れている人からすると、カジノもあるけどねというようなカジノ。反対する人も賛成する人もあまりにもカジノに囚われ過ぎていると、私は考える。従って、IRとして成功するためには、カジノに頼らないIR独自の魅力をこれからどうやって構築していくかが大事だと私は考える。リゾートと言われているところの栄枯盛衰を見ると、本物は残るけど、偽物は廃れていくということ、この言葉に尽きると思う。京都の街並み、奈良の街並み、これは何十年経っても、何百年経っても、本物であるがゆえに、やっぱりそれなりの価値を持ち続けることができる。IRとして本物の価値を世界に対してアピールすることが勝負だと私は思う。

和歌山IRの本物は何か、突き詰めて考えてみたときに、3つ挙げられる。

1つ目は海。我々は島国に住んでいるので、海は身近な存在であるが、世界の大部分の人にとって、やっぱり海というのはそんなに身近な存在ではない。和歌山IRは、海・マリナーがあるとか、海にアクセスできる、海で遊べる、この海の魅力というのをどういうふうに本物として支えていくかというのが、一つのIR成功のカギではないかと思う。

次に、和歌山ならではの太陽光線、明るさ、日差しの良さ。日本海側の人や、年齢の高い人、高齢者にとっては、太陽の光、明るさは何よりも魅力。これは和歌山がもっている本物です。

3点目、もう少し具体的な話になるが、和歌山は例えば高野山あるいは熊野古道といった、本物にアクセスするために、わざわざ和歌山市まで来てから高野山に行こう、熊野古道に行こうという人はほとんどいない。高野山に行くとしても大阪から南海で行く方が早い。熊野古道だって、名古屋のほうから行く方がアクセスはいい。和歌山県内には立ち寄りけれども、我々のイメージする人口密集地帯の和歌山まではお金が落ちない。それを和歌山IRに来れば、熊野古道に行くにしても高野山に行くとしても、とりあえずそこにワンストップすれば、全て回れるようなバスルートがあるとか、毎日定期的に午前と午後、バスが出ますとか、とりあえず関空に着いたら、大阪に行かずにそのまますぐ和歌山IRに来て、和歌山IRに来れば全部回れるような施設の整備計画が、これから具体的にIRを作っていくうえで、大事な観点ではないかと考える。

2点目、どうしてもカジノのオペレーションに関して、我々は知見がない。従って、ネゴシエーションになると、カジノのことは俺に任せると、全部俺がわかってやるんだからと事業者は主張する。カジノの日々のオペレーションは事業者任せないと仕方がないが、いざという時は公益的な観点から、場合によっては県当局としてあるいは県当局の意見を公益的な観点から代弁する者が必要である。以下はあくまで例に過ぎないが、幾つか事例を挙げると、例えば、営業時間。世界にはアメリカ型のカジノと、ヨーロッパ型のカジノがある。ア

メリカ型のカジノだと、カジノというのは24時間型が当たり前だが、ヨーロッパのカジノには閉店時間があって、午前2時、3時には閉店し、次の日の12時までは開かない。その間、カジノとしては掃除をしたり器具を整えたりするというのがヨーロッパのカジノの常識である。IRとしてどういう形で運営していくかによるが、カジノのオペレーションの部分を最初からオペレーターに丸投げしてしまうと、必ず後からもめごとの種になってしまう。

また、設置されるゲーム、特にテーブルゲームの種類とその比率も問題となる可能性がある。一つの例を言うと、シンガポールのカジノは開業からほぼ10年経つが、初期の頃、マリーナベイサンズのカジノであれば、テーブルゲームだとブラックジャックのテーブル、バカラのテーブル、ポーカーのテーブルが、それなりの世界のスタンダードの比率に従っていた。しかし、主たる客は中国人の観光客である。中国人はバカラが大好きなので、売上を上げようと中国人に合わせて、みるみるバカラのテーブルだらけになった。私はシンガポールに何回も行っているが、年を追うごとにテーブルゲームのバカラの比率が高くなり、ほとんどブラックジャックやポーカーのテーブルがなくなってしまった。そうするとどうなることが起きるかということ、ヨーロッパやアメリカの人たちは、ブラックジャックやポーカーはするが、バカラはあまりしないので、そういうテーブルを見るとこんなところでは遊べないとなる。カジノとしては世界的にみて異質なカジノが出来上がってしまったが、売上最優先、中国人最優先にすると当然そういうオペレーションになる。そういうカジノを日本が作りたいのか。いざという時に、そこまでバカラのテーブルを増やしたらまずいのではないかと、県としてあるいは県を代弁する公益的な観点から全体を見る人が、意見を言えるようなメカニズムをあらかじめ事業者との間で構築することが必要ではないかと思う。

また、払い戻し率や払い戻しに影響するルールであるが、例えば、ヨーロッパのルーレットは0が1つだけだが、アメリカのルーレットには0と00があり、お金での払い戻し率は2倍以上違う。どちらのゲームを選ぶのか、どちらのルールでカジノを構築していくのか。あるいは、スロットマシンの払い戻し率は器械的に簡単に調整できるので、収益だけ優先すれば払い戻しの渋いカジノマシーンを並べることになり、客にとって不利な条件で運営することもできる。最初から丸投げすると、このようなカジノが出来上がり、カジノとしての評判を落とすことになる。最低かけ金、最高かけ金、その占有率、どういう客層を狙うのか、お金持ちを優遇するのか、庶民まで参加してもらえるカジノにするのか、あまりお客のレベルを下げるとどうなるか、逆に上げ過ぎるとどうなるか、等々の事項について、ある程度公益的な観点から意見を言えるような段取り、ルールを決めておくことが必要と考える。

○（伊藤座長）

ありがとうございました。奥が深く、勉強になった。続いて牧野委員から願います。牧野委員は関西経済連合会の副会長もされており、関西経済界として和歌山IRに対する意見やサステナビリティやSDGsの観点から発言をいただきたいと思う。

○（牧野委員）

今回初めて参加させていただく。紹介いただいたように関経連の副会長、大阪商工会議所

など大手財界活動をしている。有識者会議においては、昨年の秋にメンバーに就任させていただいた。どれだけ役に立てるかわからないが最善を尽くす。

私の基本的な考え方としては、日本全体が閉塞感に覆われている中で、自らが行動することが何よりも必要だと考えており、この IR についてもぜひ進めて行くべきと考えている。事業計画については、クレアベストが国のガイドラインに従って作っているのだから、私が口をはさむこともないし、全く異論はない。

一般論的な話になるが、発言させていただく。我が国においては、バブル崩壊後の経済の低迷、人口減少、少子高齢化、都市部への一極集中、地方の過疎化、インフラなどの社会資本の老朽化、低い労働生産性など多くの社会的な課題を抱えている。加えて、気候変動など地球規模の対策が急務になっている状況。それらに対して様々な対策が必要となるが、IR もその解決策の1つと捉えられ、ぜひ進めていくべき企画だと考えている。

IR に関しては、和歌山のほか大阪も名乗りを上げているのは皆様もご存じのとおり。和歌山の大きなメリットは、建設予定地のマリーナシティはすでに整地済みであり、大阪の2030年の開業に比べ、和歌山は2027年からの早期開業ができることにある。3年間の差は大きい。優良顧客の抱え込みに絶対優位があり、開業後の収益に大きな影響がある。

このようなビッグプロジェクトは手続きや対処する問題が多くなり、工期が遅れがちであるため、しっかりとスケジュール管理が重要。仮に、計画通り2027年開業ができたとしても、2025大阪・関西万博、まだ決まっていないが2026年ワールドマスターズゲームズに続いて、開業を迎えることになり、この流れを有効に使うべきだと思う。

地元企業の巻き込みについて、株式構成はクレアベスト社やシーザーズ社といった外資中心となっているが、なるべく多くの地元企業を巻き込む必要がある。IRの運営利益から直接県や市に大きなお金が落とされるが、それだけではなく、地域観光や社会インフラの整備、就業の誘発など経済効果も多くなる。それらの効果を地元に取り込むことで地域貢献にもつながる。そのためにも地元企業を大いに巻き込むべき。IRが開業したものの外国企業だけがもうかるだけではなく、地元企業も一緒に成長できる仕組みが重要。IR誘致においては、地元理解の促進も重要であるため、味方を増やすという意味でも巻き込むことが必要。

次にインバウンドの取り込みの重要性であるが、和歌山県に観光客を呼び込むことができれば、これまで京阪神に偏っていた観光地域の偏在の是正につながる。そのために和歌山の魅力PRは当然だが、京都、大阪、神戸にも興味を持っている外国人観光客は少なくないので、和歌山県を点として見るのではなく、和歌山とその他の地域を回遊できる仕組みで地域としてお迎えすることが大切。

大阪夢洲にもIRが計画されているが、シンガポールを好事例にして大阪と和歌山がそれぞれの強みや役割分担により共存共栄できるイメージが良い。人流を作るという意味で、高速道路などの陸路だけではなく、船など海上の移動も含め様々なアイデアが必要。和歌山、関西といった小さな目線ではなく、日本観光のゲートウェイとして、全国に観光客を送り出すように考えていただければよいと思う。

環境負荷軽減の視点も必要である。ご承知のとおり2050年のカーボンニュートラルに向けて、世界規模で脱炭素への取組が加速度的に進んでいる。観光客や従業員の移動手段として燃料電池自動車、燃料電池バスの運行やマリーナという特性を生かした燃料電池船、IR区域内での脱炭素化なども一つのアイデアである。

また、先端テクノロジー、データも活用し、マリーナシティのまち全体のスマート化、安心安全で暮らしやすく、再び訪れたいくなるようなまちづくりを提案することも大変重要な視点である。

さらに、IR の成功には、地元住民への丁寧な説明、理解をいただくことも重要である。マリーナシティが整地済みであるため、大阪夢洲と違い土壌対策に関する負担もないと思う。IR 事業全体としてリスクがない点についても県民にしっかりとアピールできる点だと思う。

加えて、IR のような新しい取組を、和歌山として雇用の維持拡大であるとか人材の育成につなげていく点についても、もっと強調すべきだと思う。

最後にギャンブル依存症やマネーロンダリングなどリスクを問題にする人も少なくないが、悪い点だけではなく、メリット、デメリットをトータルで見えていただくことが重要だと思う。日本にはカジノはないが、パチンコ、競馬、競輪、競艇があり、ギャンブル依存症は諸外国よりも多いという説もある。IR で得た収益をある程度予算化した中で、総合的な依存症対策がなされて、最終的に IR ができたおかげで全体に依存症が減少することが理想的だと思う。

地方創生、人材の活性化などが図られ、社会課題解決にも資する企画であると思うので、本 IR の計画に賛同させていただく。

○（伊藤座長）

ありがとうございました。続いて、吉川委員は、認知心理学・認知科学を専門とし、選定委員会の委員も務められた。依存症の観点から意見や和歌山 IR に期待することなどについて発言をお願いします。

○（吉川委員）

私が主に担当しているのは、カジノの有害な影響の排除に関すること、ギャンブル依存症対策への意見ということで参加してきた。カジノができたときに、依存症の発生をどう抑えるかについては、海外でかなり多くの取組があり、レスポンシブルゲーミング（責任あるゲーミング）など様々な対策がリストアップされている。今日の資料でも依存症対策の推進計画に基づく取組ということで、連携協力体制の整備、正しい知識の普及啓発、予防教育、従業員の研修、支援体制の充実などリストアップされており、それらをきちんと実施できれば依存症のリスクは抑制できるでしょうという方向性はすでに出ている。

依存症対策で一番大事なのは、住民が持っている依存症に対する不安を安心に変えること。IR 施設ができることで、先ほど牧野委員からもあったが、パチンコや競輪、競馬など既にある依存の問題に対して、新たな対策を立てるための方針も生まれるだろう。こういうポジティブな影響があることを住民に対してしっかりと伝えていくことが必要だ。依存症対策の効果は、カジノができて 1, 2 年といった短い期間ではなく、5 年 10 年の長いスパンで効果を検証していかなければならない。その部分が一番大事ではないかと思う。

つまり、我々が考えないといけないのは、実際に起こりうる依存症への対策をどうするかはもちろんだが、住民の人たちの中にあるカジノに対する一抹の不安、既にある依存症にどう対応するのかという問題ではないか。カジノで取り組まれる様々な有害事象の排除が

うまくいくことで、現在ある依存症問題の改善につながることを地道に示していくことが重要だと考えている。

私は、認知心理学が専門で、直接、依存症の治療をしてきたわけではないが、京都大学にいたときに韓国のカジノのゲーミングのデータを利用して、ギャンブルをする人の行動パターンの分析をする研究に参加した。それは論文として発表され、非常に注目された。なぜ注目をされたかということ、それまでのギャンブルに関する基礎研究は、あくまで実験室の中で人工的につくられたギャンブルの環境での行動を分析する研究がほとんどだった。実際のカジノでのデータを使った研究というのはほとんどない。実際のカジノでの行動を研究に利用できればよいと思う。もちろん個人情報の問題をクリアしないといけないが、長期的に依存症対策を本気で考えていくためには、そういった基礎研究のできる体制を構築するというのは非常に重要である。

そのほか、アメリカで上手くいっている依存症対策が、日本という文化の中で本当に効果があるのかどうか、それはやってみないと分からない。また、県民の方が感じているカジノに対する一抹の不安をどうやって解消していくのか、これも未知のことである。よって、既に他国で実施されている依存症対策について丁寧に情報収集をして、それを積極的に県民に開示していくことが必要。そしてそれを日本の文化の中で、和歌山の地で、どのように展開し実際の依存症の予防に結びつけていくのか、息の長い取組になる。それは、カジノだけに留まらず、他の依存症問題にもポジティブに働くものとなる。

○（伊藤委員）

私からもいくつか意見を述べる。一般的なことになるが、まず大事なものはスピード感、これを確認したい。ある首都圏の鉄道会社の社長と話したが、人口減少、少子高齢化で鉄道利用者は減るのは前から分かっていたが、コロナが起きて、10年、20年で減っていくものが1週間で消滅してしまい、少子高齢化の近未来を実際に見てしまった。

IRは地域の活性化を考えるうえで、少子高齢化等の大きな流れを考えて出てきたわけだが、このスピード感は少子高齢化だけでなく、SDGsや環境の問題、ITデジタル化、グローバル化、近隣諸国との関係も同様で、そういったスピード感をも意識し、考えていかなければならない。

東京のような大都市なら大型・大規模投資が起爆剤になって活性化が進むというのがよくあるが、地方の地域経済では民間の投資だけでこのような起爆剤を作るのは難しい。そのため、国や県・市が関与したIRのようなプロジェクトは極めて重要で、すべて自治体がするのではなく、民間をどう巻き込むのか、県がどうリードするのが重要となる。先ほどカジノに関して丸投げという議論があったが、どこまで県が関与して、どこまで事業者任せなのか検討いただきたい。

少子高齢化のなかでは、交流人口を増やすことができなければ地域活性化は難しい。従来の物見観光だけではなく、深みのある、多様性のある、MICEのような交流の多様性を深めることが重要である。

また、和歌山を点として考えるのではなく、他の地域とのネットワーク、広域観光も大切である。重要なのはどうやって動かしていくのか。実際に動かす中で必要に応じて仕組みを見直すような柔軟な対応が必要となる。

○（大久保委員）

和食文化に関する動きは、現在、国の雰囲気も活発になってきて、食文化が日本でも浸透しているが、5年後どうなっているか分からないので困っている。伊藤座長の話にもあったように、非常に速く時間が進んでいる。グローバル化も同様。食に関しても2極化している。グレードの高い層と、その日食べるのがやっとという層。それで、このIRの対象がどのあたりなのか、どこまで食文化を高めていくのか、そういっためざす目的みたいなところを確認したい。ゆとりのある人の施設と考えていいのか。ターゲットをどうするかによって中身が変わり、意図も変わってくる。

もう一つは、国の政策として食育というのが緻密に広がっていて、知識は入ってくるのだが、コロナでデジタル化が加速しているので、目や耳からの知識は入っていくが、実物を食べずに知識ばかり入ってくるという時代になってきている。そのため、ここに来なければ体験できないというのをコンセプトにすることはよいと考える。実際に来て、ふれないと経験値とならないし、知恵も浮かばない。食べることを通して、ただ食べるだけでなく、それがどこから来たものか、どうやって来たのか、誰が考えたのか、そういったことまでを含めて、幼児から小学校、中学校、高等学校等と繋げていくことが必要。次の世代に受け継ぐには時間が必要で、一度経験させて終わりではなく、日常生活の中でたくさん経験することで、調理技術も上がるので、そういう経験が必要だという発信をしていただきたい。なかなか難しいと思う。計画には経験できる場と書いてありそれも重要ではあるが、そういう経験をした上で、次のステップにつなげるような企画をしていただきたい。

○（伊藤座長）

佐伯委員のカジノのターゲットの話や大久保委員の食の話を聞いていて気になったのが、この計画案というものは、どうしてもプロダクトアウト、どういうものを提供するのという視点になりがちである。それはそれでよいが、一方でマーケットイン、どういう人に利用してほしいのか、どういう人に来てもらうのかという視点も意識しながら考えていけば、もっと議論が深まるのではないかと。

また、連続性というのも重要である。IRに来た後に、他の観光地に行くといった連続性だけでなく、大久保委員がお話しされたような、その先のアクティビティや経験というものにつなげることによって、結果的にはIRが単に1回きりのものにならないということでもある。

○（谷口委員）

スピード感と官民連携は非常に重要。期限のある話なので、歩きながら、進めながら改善・修正していくことが重要である。官民連携協議会のようなものを設置して対応することがいいのではないかと。

私も食文化が重要だと思う。ともすれば、収益に特化されがちだが、文明と文化の違いというものもややこしいが、文明というのはグローバリゼーション、普遍的だということだと思うが、文化は生活文化と言われるように地域に固有のところがある。日本は仏教も儒教もいろいろと取り入れて、日本風にアレンジして融合させている。そういう意味で、カジノやIR

といった新しいものをうまく取り入れながら、和歌山らしく歴史文化を融合していくということが、和歌山の誇れる進取の気性と、伝統文化だと思う。生活文化ををうまく強調できれば、他と差別化が図ることができる。

次に牧野委員がお話しされた地元企業の参画も重要である。口は出すけど金を出さないではなく、未来への投資と強調することが必要ではないか。守りと攻めということで、先ほど牧野委員からも話があった日本全体の閉塞感をブレイクスルーするという意味で、防災減災、維持管理更新の他、経済成長に資するインフラを活かすことが大事であるが、現状は国の予算の6割があてられている防災減災、国土強靱化、維持管理の分野がどんどん増えていったときに、全体が伸びなければ、残り4割を未来への投資、未来のストック増に繋がらない恐れがある。

既存のインフラだけでなく、ITも含めてになるが、例えば、カーボンニュートラルとして、アメリカのバイデン大統領が今年の3月にEV充電器を50万台設置するということを出したが、政府の官民連携の中で、公と民がうまく連携を取りながら、また、役割分担をしながら、未来への投資をしていく必要があると思う。国内で言えば、和歌山は守りだけで、他地域がどんどん先へ行くようであれば、相対的に地盤沈下していく。そういうような姿勢をもっと強調すればいいものになると感じた。

○（佐伯委員）

先程、伊藤座長がご指摘になった「どういう客層を狙うのか」という話題だが、これはやってみないとわからない。とりあえず最初は、食文化でもカジノでも、門戸はとりあえず広く開いておいて、来る客層、そこが生み出すメリットとデメリットを勘案しながら、少しずつ微修正する必要がある。大事なことは、微修正をしていくメカニズムの中で、公益的観点、県の意見をどういう形で反映していくのかというメカニズムをあらかじめ相手方ときっちり決めておく必要があると思う。任せてしまって、相手方に手も口も出せませんでは、まずいと思う。背景にあるのは、民は選べて官はいつも邪魔をするというような民活絶対視はやめる。公益的な観点から一定の責任があるので、いろんなオペレーションに関して、必要な場合にはカジノだけに限らず、口が出せるというようなメカニズムをある程度先々から考えておく必要があると思う。

○（伊藤座長）

最近の流行用語で「アジャイル」という言葉ある。やってみてダメならすぐに修正するということが重要だということであるが、この場合どこまで柔軟にやるかということもそれ自身が論点ではある。せっかくなので、牧野委員に対してコメントがあったが、官民の関係や今の状況に対するブレイクスルーという観点から何かコメントあるか。

○（牧野委員）

依存症対策というものを皆さん心配されていると思うが、あまり心配をして、依存症対策ということで規制強化になってしまうと人が動けなくなってしまう。そういう風にならないようにするにはどうしたらいいのか。なんでも法律でくくってしまって、人を動けなくすると規制強化になってしまい、色々なことをするにしても大変になる。世の中の動きと反対

にならないようするためにはどうしたらいいのかというのが問題になると思う。

○（伊藤座長）

学者がこういう議論をするとき、規制改革という言葉を使う。過度な規制をすればかえっていろんな問題が出ることもある。あるいは住民の方々の理解を得られるような改革みたいなものを打ち出すことが重要である。

○（吉川委員）

自分自身、カジノにはあまり縁がないと思っていたが、委員になったことでラスベガスに行った。その時に思ったことだが、日本だと、ギャンブルに対してネガティブなイメージが強いが、ラスベガスにおいては高度な産業という非常に魅力的な印象を受けた。日本にカジノができたときに、例えば海外から有名な俳優やミュージシャンが訪れて和歌山の IR で楽しい時間を過ごすとなれば、私たち日本人が何となくもっているカジノを警戒するイメージも変わっていくきっかけになると思う。すべてのリスクをゼロにすることは現実的に難しいかもしれないが、しっかり対策をたてることでリスクを最小限にすることは可能だと思う。

また、継続的な事業運営には「本物であることが大事」ということについては私もそう思う。和歌山には本物の文化資源がたくさんあるので、それを海外の人たちにどれだけアピールできるかが一つのポイントだと思う。現代アートの分野で、日本のアーティストの作品が海外で非常に人気がある。現代アートだけでなく、日本のもつ歴史的で文化的な資源は海外では日本以上に注目されているところ。和歌山 IR が、日本人がまだ気づいていない、非常に高い水準の文化や伝統工芸、観光資源などそういうものを海外の人たちに知ってもらい、海外の人たちの目で、日本の文化や伝統資源・産業の価値を評価してもらうきっかけになればいいと思う。

○（伊藤座長）

前半にあった住民がもつ依存症に対する不安を安心に変えられたらというものに関連するが、IR 施設を通じたカジノを含めたアクティビティについて、どういうふうに発信するのが重要というのはそのとおり。現在アートの話も出たが、今後それも含めて、色々なアクティビティが行われると思う。誰が企画してやるのかということもあるが、その部分を早く出して議論できれば、施設の発信とも連携してうまくいくのかなと感じた。

○（谷口委員）

吉川委員にお聞きしたいが、カジノと他のギャンブルの大きな違いは何かあるか。

○（吉川委員）

のめり込むという心の働きという観点で見ると大きな違いはない。どれくらいの経済的な資源をもって関わるか、その人の生活のあり方などの人の属性、周りにどういう人がいるかという環境などは人によって大きな違いがあると思うが、人がのめりこむプロセスという観点では違いがない。韓国のデータでどういう人がのめりこみやすいのか、のめり込みや

すい行動パターンについての分析もした。カジノでの行動も、パチンコや競輪、競馬等でのめり込むプロセスと本質的に大きく違うものはない。

○（谷口委員）

佐伯委員が最初におっしゃられたカジノに頼りすぎるなという話を思い出した。最初の有識者会議での知事の話で、ラスベガスも最初はカジノが6割だったが今は3割ぐらいに減っている。カジノにIRを取り込めというものをポジティブに捉えて、うまく説明して、住民の不安を解消することに努めていただければと思う。

○（佐伯委員）

のめり込むのはどこが違うのかという話だが、カジノも競馬もどちらものめり込める。ただ、中央競馬会の競馬は、土曜日と日曜日、1週間に2回しか開催しないし、1日12レースしかないため、のめり込もうとしても24回しかのめり込めない。カジノは24時間あれば24時間のめり込める。深刻の度合いがますます増える可能性がある。ただ、個人として消費できる金額は、ある程度、キャッシュでやっている限り、限界があるため、何回のめり込めるかという一定の限度がある。そこでキャッシングができると、のめり込みの程度は深くなる。それをするかどうかは本人次第であり、どこが違うかというと、のめり込める回数と時間の違い。パチンコはそういう意味では、ずっとのめり込めるため、のめり込める可能性が高い。

例えば、吉川委員にはぜひヨーロッパのカジノを是非見ていただきたい。カジノが日本人の大部分にマイナスなイメージをもたれている一番の根源は、ラスベガス型のカジノしか知らないから。ヨーロッパでは、基本的にお金にゆとりのある一定の社会的地位のある人が遊びに行く高級施設というものである。カジノがあることがマイナスなイメージではなく、高級でポジティブなイメージがヨーロッパにはある。一方で、アメリカは庶民に開放しているので、庶民に開放しているが故に、庶民向けのエンターテイメントやショーやマジック、シルクドソレイユなどのエンターテイメントを一緒に提供している。ヨーロッパにはそれがない。なぜかという、お金持ちが気軽に遊びに行って、そこで知り合いと会話をしたり、レストランでゆっくり食事をして、ゆとりのある生活を楽しむ場所。ショーやエンターテイメントをする路線とヨーロッパ型の路線とは違う。ハイブリットを目指したのがシンガポールのカジノで、彼らは意図的にハイブリット型にしようとしたが、運営している内に客の大部分が中国人になり、どんどんそっちに走ってしまった。その成功事例と失敗事例を我々は具体的に知っているため、今度作るカジノをどういう形であるかについては先例がある。所詮、規模が小さいので、カジノに一生懸命入れ込むというよりも、IR全体としての魅力を高めるべきだと思う。

●（仁坂知事）

ありがとうございました。ものすごくIRを勉強したつもりだったが、またものすごく勉強になって、大変実りの多い議論をしていただいた。私も佐伯委員もカジノエンターテイメントを日本に定着させようという運動を始めた人で、その時のモデルは完全にヨーロッパ型であった。日本にも、特に和歌山には老舗のホテルがあるからホテルの客層を上げて、リ

ノバージョンするときこういうことが楽しめますよと言ったら絶対に人が来るなど。ごんまりとして、あまりお客さんを入れずにやらせてくれないかなというのが一番初めの話であった。ところが政府の方は、今の日本はあまり経済が盛んではないということを考えて、起死回生の経済振興策にしようと考えた節がある。それはものすごくわかるが、そのかわりちょっとしか作らせないと変わった。

そんな中、シンガポールの大型のIRをやろうと思えばできにくいから、始めているのが和歌山IR。シンガポールに行くと、色々勉強をすると、あのあたりからシンガポールの経済構造あるいは広い意味での産業構造が随分変わった。シンガポールは重化学工業や海運の基地だったが、それがダメになりそうになったので、IRなどをテコにして、金融やサービス業の中心を作ったというのがシンガポールの国作りで、よく考えているなど感動して見ていた。和歌山でも一つの起爆剤として使えたらいいなと思っている。シンガポールで聞いてみると、大阪・和歌山間どころでなくくらい近接したところに2つあるが、両方とも流行っている。カジノ以外のコンセプトは少し変えており、片方は遊び型で、もう片方はビジネス型。両方とも共通しているのが、初めはシンガポール人がカジノに多く出入りしたが、飽きてきて数が減り、カジノの収益を回そうと思っていたカジノ以外の部分にたくさんのシンガポール人が集まるようになった。特に、マリーナベイサンズは押すな押すなで、東京で言うと銀座通りができたという雰囲気のような感じで、カジノはあるものの、皆そこへは行かない。そこに誰が行っているかという、専ら中国人御用達になっていて、全体として回っているという感じであった。和歌山もそんな風になってもいいなと思っており、特に和歌山県民が依存症になって狂ってしまうというのは論理的にも絶対に許さない、規制強化でもして絶対に許さないというふうに色々考えている。今日の会議で、ああそうかとそこで実験して調査してしまえばいいと思った。そのようなことも含めて今日の話をとくさん参考にさせていただいて、さらに良いものに仕上がるようにあとわずかな時間であるが、がんばってやっていきたい。

○（伊藤座長）

仁坂知事ありがとうございました。それでは本日いただいた御意見につきましては、事務局でとりまとめをお願いします。

△（楠見室長）

伊藤座長ありがとうございました。委員の皆様には、長時間にわたり貴重なご意見、ご提案をいただき、誠にありがとうございました。本日いただいた御意見などについては、後日とりまとめをした上で、議事要旨とともにお送りさせていただきます。

今後については、本日皆様からいただいたご意見等や、パブリックコメントや今後予定している説明会、公聴会においていただいたご意見を区域整備計画に反映し、和歌山市及び和歌山県公安委員会に協議をかけて、和歌山県議会における議決をいただいて、4月28日までに国へ申請をしたいと考えている。こういった一連の手続きのなかで、改めて委員の皆様方にはご相談させていただくこともあるかと思うが、ご指導の程よろしく申し上げます。

これで会議を終了したいと思う。本日皆様ありがとうございました。この後、取材に移るので、委員の皆様は控室に移動していただきますようお願いする。